

## 小学校におけるチェンバロを用いた鑑賞教育研究

和歌山市立藤戸台小学校：高木視帆

和歌山大学教育学部：山名敏之

### 【研究の趣旨】

バロックおよび古典派のレパートリーは、小学校音楽科鑑賞教育において主要な位置を占めている。これはポピュラー音楽をも含めていわゆる今日の西洋音楽の基礎がこの18世紀に確立されたことと深く関係している。つまり「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わう」ためには特にバロックおよび古典派のレパートリーへの理解が基礎となる。今日その鑑賞教育におけるピリオド楽器による演奏の採用が目立って来た。「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞する」ためには当然のことと考えられる。

バロックおよび古典派初期の鍵盤楽器といえば今日のようなピアノではなく、チェンバロであったことは周知の事実である。本連携では、強弱の変化をつけることの不可能な発音構造を持つ楽器であるチェンバロの全盛期に、「音楽を形づくっている要素」の中でももっとも基本的な要素といえる拍子が高度に発達したという逆説的な歴史的背景を踏まえ、①拍のながれを表現する為には強弱法によるのではなく長短法を主体とすべきであること、②長短法は音色、リズム、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている諸要素の感受および表現に大きく関わっていることという2点について、大学に設置されているチェンバロを運び込むことによって実践的に鑑賞教育を行う方法について共同研究する。

### 1. 題材名

耳で聴く歴史 ～チェンバロを知ろう～

### 2. 題材の目標

- ・チェンバロの発音原理と音の強弱がつかないという特性について理解する。
- ・チェンバロを実際に触ることによって現代のピアノとの相違を体感する。
- ・鑑賞を通して、チェンバロを聴いたことがある戦国武将と心を通わせてみる。

### 3. 題材について

歴史上の様々な事象を、時系列に沿った事実の羅列として知るだけでは歴史を学ぶことの意味が薄れてしまう。歴史上の人々が何を感じ、何を決断し、どう苦しみ、怒り、喜びを感じたのか、これを自分のなかの出来ごととして取り込んでこそ歴史の学びは活かされ、私達は未来に向かいどう進んで行くべきなのかということが、示唆される。

本授業は、社会科教育と音楽科教育の融合を試みるものである。プログラム2. および3. は、1500年代後半に織田信長や豊臣秀吉とその周辺の武将達が南蛮文化に触れた時の驚き、憧れ、畏れ、感動の一端を共有し、歴史の息づかいを味わわせることを目的としている。先進的な異文化に触れた当時の人々が何を感じ、知略を廻らせることになるか、その想像を羽ばたかせ、より深く歴史を知ろうとする意欲の発火点とするのである。

そのために授業者は、織田信長や豊臣秀吉が聴いたであろう楽曲を現代のピアノによって演奏してはならない。彼らが聴いた音や響きを再現してこそ、彼らの心の有り様に迫ることができるのである。従って現代のピアノではなくチェンバロによる生徒たちへのアプローチが必要になってくる。

現代のピアノとは異なる楽器が昔は使われていたこと、そして発音原理の違いを理解し、さらには演奏を鑑賞するだけではなく実際に楽器に触れてみることから、当時の人々と現代人との美意識の相違を体感するとともに、その相違を超えて共通の「感情」を共有することができることを学ぶ。

#### 4. 対象：藤戸台小学校6年生児童

【表】藤戸台小学校との連携事業の取り組み経過

	取り組みの内容	日時	場所
1	高木先生とチェンバロを教材とする鑑賞授業の実施に関する協議を行う。	メール等による意見交換	教育学部
2	高木先生担任クラスの児童による、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3者を比較する、討議形式の授業を参観する。児童らがもっとも優れていると推薦する武将について事前に調べ、まとめたことを基にチームで発表し、討論するという興味深い授業形態。それぞれの武将の性格、歴史上の功績について詳しく調べていたことが印象的であった。この下地に上記3者が実際に聴いた可能性のある南蛮音楽を鑑賞させることによって、西洋文化に初めて触れた彼らの驚きに思いを馳せることができると考えた。	9/3	藤戸台小学校
3	高木先生と協議を重ねながら、授業案を作成。授業実践者は山名が担当。対象が第6学年であり、9月の社会の授業において戦国時代について学んだことをふまえ、戦国武将が聴いた南蛮音楽を授業のテーマとすることとした。その上で授業本番のワークシートにおいて、○ピアノとチェンバロの発音原理の相違/○チェンバロにおける弦を撥く素材を解説し、演奏曲目は、現代のピアノとの音色の比較材料として、1. ペツォール作曲メヌエット、3者が聴いた可能性のある作品として 2. 作者不詳のシャンパーニュ地方の輪舞（16世紀）、3.アントニオ・デ・カベソン作曲 騎士の歌による変奏曲、4. ジョン・ブル作曲 王の狩（17世紀初め）、そしてもっともチェンバロらしい作品として 5. ヨハン・ゼバスチャン・バッハ作曲 半音階的幻想曲とフーガ BWV903 をとりあげることにした。	10月から11月中旬にかけて	
4	耳で知る歴史、チェンバロを聴こう！」の授業実施。2回開講	11/22	藤戸台小学校

#### 【取り組みの成果（アンケート調査をもとに）】

ワークシートの最後には、「一番心に残った曲はなにか？演奏を聴いて思ったことを書こう。」と問いかけた。

○バッハ作曲「半音階的幻想曲とフーガ」が多くの子供にとって大変印象的だったようである。「迫力があつた」、「リズムがかっこいい」、「感情の変化がすごかつた」、「強弱があつた」、「といつた感想とともに、曲の構成により深く言及した「明るく楽しい部分と悲しい部分があつて面白い曲だつた」、「リズムが変化していくのがおもしろかつた」といふ曲の構成についての感想

も散見された。

○上記バッハ派が多数を占める一方で、ピアノの音色との比較から既知の作品であるペツォールト作曲のメヌエットを選んでいく児童も少数いた。

○少数派ではあったが、アンコールに演奏したフランソワ・クーブラン作曲「神秘のバリケード」を「とってもお洒落、ほんとうにパリみたい」とお気に入りに選んでいた児童がいた。

○織田信長や豊臣秀吉がチェンバロを聴いていたなんて「衝撃的」との感想を書いた児童が相当数いた。

○チェンバロの音が綺麗、という感想も相当数あった。

○チェンバロの音を弦楽器にたとえる感想が少なからず見受けられた。授業内ではこの点に触れていなかったことから、優れた感性であると考えられる。

○「強弱がついていて云々」の感想が複数見られた。この場合、授業内ではチェンバロの特性として強弱のつかない楽器であること、そのため音の長短のさじ加減で演奏表現をすることを説明していたことから、それでも「強弱がつく」と判断していると考えられ、興味深い。音の長短のさじ加減は人の耳には強弱として捉えられるという、音楽の本質をつく感想といえる。

○ピアノと比較して鍵盤が軽く驚いたといった感想も見られた。

○定番の感想といえるが、黒白逆転した鍵盤に関する言及は多々見られた。

### 【今後の課題】

○授業終了までの感想を記述する時間が短かったこともあるが、やや淡白な感想が多かった。次回は文章にまとめる時間を授業時間外に設けることも検討するべきである。

○今回は藤戸台小学校という和歌山大学と隣接している学校での実践であり、また共同研究者の高木視帆先生はチェンバロの搬入搬出およびチューニングに関して深く理解されている方であったことから、前述に関する障害は起こらなかった。しかし今後、この鑑賞教室を他校においても実践していくためには、搬入の時間帯と鑑賞教室の開始時間の打合わせ、チューニング時間の確保、チューニングのための静穏な環境の確保といったことへの実践先への理解が求められるであろう。

